育児に特別な配慮が必要な乳幼児の家族に対する

ナラティヴケア・ガイドライン

―小冊子「家族のあゆみ」の活用―

平成 26～28 年度　科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）
「ナラティヴ・アプローチによる育児困難乳幼児の祖父母支援の検証とガイドラインの創生」
研究代表者：石井邦子（千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科）

研究の概要

【研究の背景】

養育上特別の配慮を必要とする乳幼児の育児には、主たる養育者である親だけではなく、祖父母を中心とした家族が関与する。しかし、育児支援は親に対するものに限定され、家族に対する支援はほとんど行われていない。私たちは、乳幼児とその親を支える家族への支援の必要性を痛感し、その看護方法を追求してきた。

先行研究[1)]において、養育上特別の配慮を必要とする乳幼児の祖父母の体験が「孫の疾病や障害に強い衝撃を受けて苦しみ、徐々に回復・安定へと向かいつつも希望と落胆の間を揺らぎ続け、一方で、息子/娘夫婦を直接的・間接的に支える立場に身をおき続け、常に息子/娘夫婦を気遣い見守る」ことを明らかにした。ここから、「ありのままを受け止め、自分らしく孫育児を行い、家族間の情緒的きずなや家族機能の安定に自分自身が関与していると自ら実感し価値づけられるような看護が必要である」との発想に至り、ナラティヴ・アプローチによる孫育児支援プログラムを開発した。ナラティヴ・アプローチは、当事者が自らの体験を語ることによって、自身の体験を再構成して意味づけ、新たな価値を作り出すことを目的とした手法であり、慢性疾患患者等の保健医療福祉サービスの分野で注目されている。しかし、看護者と乳幼児の家族が共有できる時間は限られており、それが家族にとっても看護者にとってもジレンマであるというのが実情である。

そこで、小冊子の記入と記入内容に基づく面談により家族の語りを促すナラティヴ・アプローチを考案した。乳幼児の家族が過去の体験について語ることは、体験の価値に自ら気づき、体験の再構成や意味づけをもたらし、最終的に自分自身と家族の価値づけにつながるプロセスである。さらに、そのプロセスに看護者が深い関心を寄せて関わることは、家族と看護者との間に相互作用をもたらし、より深い援助的人間関係を構築すると考える。

【研究目的】

疾病、障がい、発育上の問題を有し、養育上特別の配慮を必要とする乳幼児の家族に対する
ナラティヴ・アプローチによる看護介入の効果を抽出する

【研究方法】

《調査対象》育児上の特別な配慮を必要とする乳幼児を養育している家族

《調査時期》2015 年 10 月～2016 年 10 月

《調査方法》小冊子の記入に基づく半構成的面接法

《分析方法》
- 記入済みの小冊子の写しと面談の逐語録を研究メンバーと看護介入実施者が熟読し、「体験の想起」、「体験の再構成」、「体験の価値づけ」、「過去の自分または家族の価値づけ」、「未来の自分または家族の価値づけ」に該当する部分を抽出
- 看護介入終了後に看護者及び家族の看護介入に対する主観的評価を聴取
- 全てのデータを質的に分析

《倫理的配慮》千葉県立保健医療大学研究倫理審査委員会（No.2015-024）及び研究協力施設の研究倫理委員会の承認を得て実施

1）石井邦子、荒木暁子、小池幸子、他：育児上の特別な配慮を要する乳幼児の孫育児における祖父母の体験，千葉看護学会会誌，20(1)，3-10，2014.

「ナラティヴケア」の概要

【目的】

乳幼児の家族が、自分自身と家族の体験を再構成し、過去と未来における自分自身と家族の人生・生活・いのちの価値づけ（価値の再認識および新たな価値の発見）ができる。

【方法】

乳幼児の育児や養育に関わる家族（父母、祖父母、親族）が、自分自身および家族の体験について想起して小冊子に記入し、看護者が小冊子への記入内容を基に面談を行う。

【看護の対象】

・以下の①かつ②にあてはまる家族。

①育児上の特別な配慮を要する乳幼児の育児や養育に関わる家族。乳幼児の父母や祖父母に限らず、日常的に育児にかかわっていたり、家族の特別な出来事を共有する親族を含む。

②症状の軽快や安定、治療の終了、退院決定や在宅療養への移行など、乳幼児の治療や療養が一段落し、次の段階に進む節目を迎えており、そのための支援を必要としている家族。

・乳幼児の状態が安定していない、育児生活・療養生活の変更などの時期にある家族は除外する。

【看護者の基準】

・育児上の特別な配慮を要する乳幼児とその家族に対するケア（退院支援、育児支援など）に関する十分な看護実践経験を有し、家族のアセスメント能力および家族・集団を対象としたコミュニケーションスキルを有している。

・乳幼児と家族が受ける看護サービスに従事し、乳幼児や家族との信頼関係が構築されている。

小冊子「家族のあゆみ」の構成

小冊子の記入用紙はＡ５サイズとし、以下のように構成する。レールファイルなど、容易に用紙の追加ができる形態が望ましい。個別支援ノートなどを使用している場合は、その一部と位置づけてもよい。

表紙	乳幼児の氏名を記入する。
家族構成	同居・別居を問わず、乳幼児の育児にかかわる重要な家族員は誰かを聞き、同居と別居に分けて、乳幼児との関係と氏名を記入する。
家族の紹介	記入する人数分の用紙をセットする。乳幼児の親と祖父母だけではなく、日常的に育児に関わっていたり、家族の特別な出来事を共有する親族には記入を依頼する。 年齢、居住地、健康状態、趣味特技、性格、大切にしていること、を記入してもらう。
家族に起こった特別な出来事	乳幼児の誕生から今日までを想起し、自分たち家族にとって最も特別だと思える出来事をひとつ選んでもらう。出来事の選択方法は指定せず、家族に任せる。 選んだ特別な出来事について、日時、出来事、出来事の概要、その時の家族の気持ちを記入してもらう。
家族へのメッセージ	記入する人数分の用紙をセットする。１枚の用紙に１人へのメッセージが記入されるように、家族内で小冊子を回して記入してもらう。
家族から医療者へ	医療者への期待・要望など、自由に記入してもらう。
医療者から家族へ	看護職や他の医療スタッフから、家族に対するメッセージを記入する。

面談の実際

《面談の基本》

- 面談は、参加可能な乳幼児の家族による集団面談とする。
- 日時と場所を約束し、参加する家族が誰かを確認する。
- 面談はプライバシーが保てる場所で、40～60 分程度をめやすとして行う。
- 面談ガイドに沿って、記載内容を確認しながら記載内容の反復や補足の語りを促す。
- 語りに対する共感を示したり承認しながら傾聴する。補足の語りを促すために、オープンクエスチョン（いつ？　何？　なぜ？　どのように？）やミラーテクニック（相手の言葉をおうむ返しにすることで説明の追加を促す）などのファシリテートスキルを活用する。
- 家族が語りたいことを自由に語れるように、自然な流れを遮ったり、意図的に誘導したりしないように心がける。

《導入》

＊「家族のあゆみ」を記入してくださり、ありがとうございます。今日は、記入していただいた内容を一緒に確認させていただきながら、これまでにご家族に起こった特別な出来事、その時のご家族のお気持ちをお聞かせください。出来事を振り返ることで、改めてご家族が持つ力や絆の強さに気づき、今後の力になれば幸いです。

＊面談では、皆様がお話ししたいことを自由にお話しください。話したくないことや話しにくいことは、無理に話さなくて結構です。

＊面談は 40 分から 60 分程度を予定しています。途中で中断することができますので、ご気分が悪いなど、何かありましたら、遠慮なくお申し出ください。

《家族構成・家族の紹介》

＊最初に「家族構成」と「家族の紹介」を確認していきます。

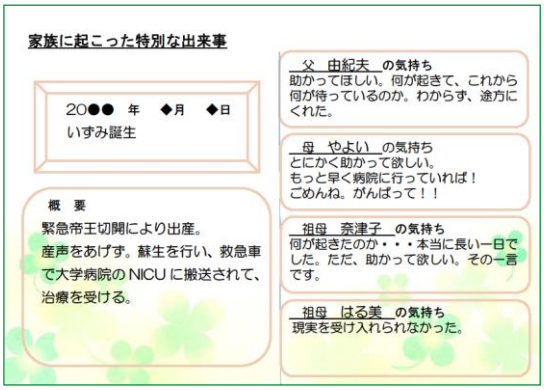
（主な記入内容を看護者が読み上げる）

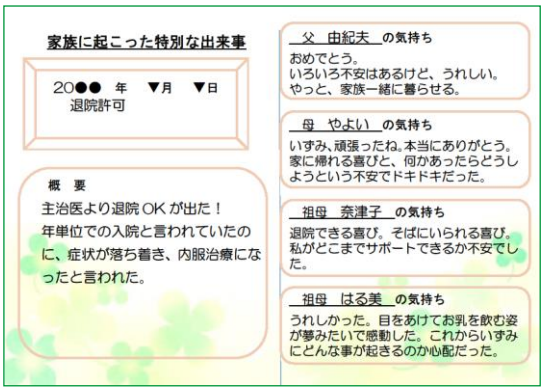
- アイスブレイクを目的として行う。家族がリラックスして面談に参加し、気軽に発言できるように、和やかな雰囲気を作る。
- 参加した家族構成等から必要だと判断した場合は、参加メンバーをどのように決めたか、メンバーが面談に参加した理由や面談に対する期待を尋ねてもよい。
- 家族について既によく知っている場合など、必要がなければ短時間で済ませる。

《家族に起こった特別な出来事》

＊〇〇ちゃんの誕生から今日までの様々な出来事の中から、「家族に起こった特別の出来事」をひとつ選んでいただきました。最初に、どのようにしてこの出来事に決めたのか、教えてください。

・この出来事を選んだのはなぜですか。
・誰がこの出来事を選んだのですか。
・どのように話し合いましたか。　等





（出来事、概要を読み上げてから）

＊この出来事について、詳しくお話しくださいますか。
＊〇〇さんはこの時のお気持ちを「……」と記載されていますが、もう少し詳しくお話しくださいますか。
＊〇〇さんはこの時にお気持ちを「……」と記載されていますが、これを見てどのように感じますか。
・それはなぜですか。

＊この出来事の他に、特別な出来事はありますか。

（出来事があげられたら）

＊その出来事について、詳しくお話しくださいますか。
＊〇〇さんはこの時のどのようなお気持ちでしたか。
＊〇〇さんのお気持ちを聞いて、どのように感じますか。
・それはなぜですか。

・出来事をひとつ選ぶ時点から体験の想起が始まっていることから、家族の中でどのように決定したのかの語りを引き出す。
・体験を想起するために必要な時間を確保する。出来事について語る中で、さらに具体的な体験の想起が行われるため、曖昧な記憶の確認や家族間での確認が十分に行われるようにする。
・出来事について語る中で、次々と体験に関連する事柄が想起され、話が長くなったり、話題が飛んだりすることがある。語り手にとっては体験の想起に不可欠な語りであることを理解し、語りを遮ったり統制したりせず、傾聴する。
・発言が少ない家族がいる場合、無理に発言を促すことはしない。出来事に関する語りが一通り終結してから、家族の語りに対する感想や追加発言を求める。
・出来事について語りの中で、家族固有のキーワードや信念・価値観が浮上する場合がある。それを看護者が言語化し家族に確認することは、自分自身と家族の価値づけを促進する。
・小冊子の記入内容や面談での語りから、家族間での出来事に対する認識の食い違いが顕在化することがある。また、出来事に関する家族の気持ちを初めて知ることもある。これらは、体験の再構成や体験の価値づけを促進するため、家族同士の自然なやり取りを尊重する。

【家族へのメッセージ】

（面談に参加している家族へのメッセージを読み上げ）

＊〇〇さんから「……」というメッセージをいただきましたが、どのように感じますか。

・それはなぜですか。

（面談に参加している家族からのメッセージを読み上げ）

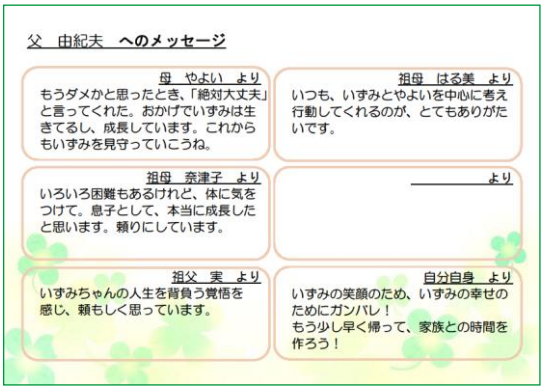
＊〇〇さんへ「……」というメッセージを送られましたが、それはなぜですか。

（自分へのメッセージを読み上げ）

＊自分自身へ「……」というメッセージを送られましたが、それはなぜですか。

（他のメッセージについて）

＊〇〇さんから〇〇さんへ「……」というメッセージが送られていますが、どのように感じますか。


父　由紀夫　へのメッセージ

母　やよい　より
もうダメかと思ったとき、「絶対大丈夫」と言ってくれた。おかげでいずみは生きてるし、成長しています。これからもいずみを見守っていこうね。

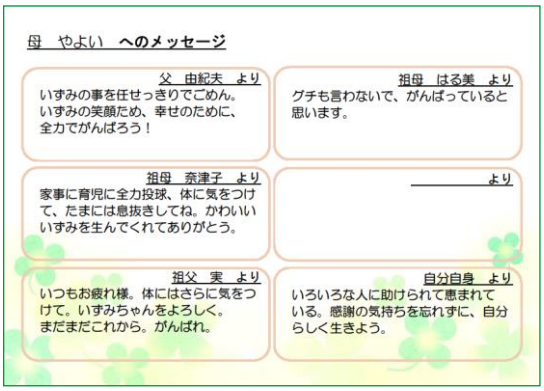
祖母　はる美　より
いつも、いずみとやよいを中心に考え行動してくれるのが、とてもありがたいです。

祖母　奈津子　より
いろいろ困難もあるけれど、体に気をつけて。息子として、本当に成長したと思います。頼りにしています。

＿＿＿＿＿　より

祖父　実　より
いずみちゃんの人生を背負う覚悟を感じ、頼もしく思っています。

自分自身　より
いずみの笑顔のため、いずみの幸せのためにガンバレ！
もう少し早く帰って、家族との時間を作ろう！


母　やよい　へのメッセージ

父　由紀夫　より
いずみの事を任せっきりでごめん。いずみの笑顔ため、幸せのために、全力でがんばろう！

祖母　はる美　より
グチも言わないで、がんばっていると思います。

祖母　奈津子　より
家事に育児に全力投球、体に気をつけて、たまには息抜きしてね。かわいいいずみを生んでくれてありがとう。

＿＿＿＿＿　より

祖父　実　より
いつもお疲れ様。体にはさらに気をつけて。いずみちゃんをよろしく。まだまだこれから。がんばれ。

自分自身　より
いろいろな人に助けられて恵まれている。感謝の気持ちを忘れずに、自分らしく生きよう。

・日頃は言葉にできないこと、伝えていないことが表出されることもあり、体験の価値づけ、自分自身や家族の価値づけを促進する。家族間のやりとりが行われるように発言を促す。
・メッセージを送った者に声に出して読んでもらってもよい。恥ずかしいと感じるなど、感情が伝わりにくい場合は、看護者が読み上げてもよい。

【面談の振り返り】

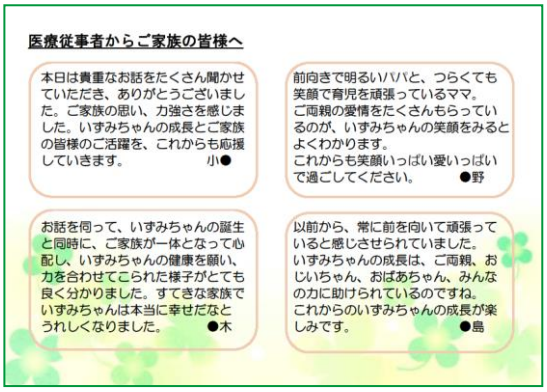
＊面談を終えて、今どのようなことを感じていますか。

＊小冊子を書いたり面談する中で、ご自身やご家族について、新たに気づいたことはありますか。

＊小冊子を書いたり面談する中で、ご自身やご家族について、感じ方が変化したことはありますか。

＊最後に、小冊子や面談の全体を通して、何かお話ししたいことはありますか。

＊看護者から〇〇さんご家族へのメッセージを書かせていただきます。後で読んでください。


医療従事者からご家族の皆様へ

本日は貴重なお話をたくさん聞かせていただき、ありがとうございました。ご家族の思い、力強さを感じました。いずみちゃんの成長とご家族の皆様のご活躍を、これからも応援していきます。　小●

前向きで明るいパパと、つらくても笑顔で育児を頑張っているママ。ご両親の愛情をたくさんもらっているのが、いずみちゃんの笑顔をみるとよくわかります。これからも笑顔いっぱい愛いっぱいで過ごしてください。　●野

お話を伺って、いずみちゃんの誕生と同時に、ご家族が一体となって心配し、いずみちゃんの健康を願い、力を合わせてこられた様子がとても良く分かりました。すてきな家族でいずみちゃんは本当に幸せだなとうれしくなりました。　●木

以前から、常に前を向いて頑張っていると感じさせられていました。いずみちゃんの成長は、ご両親、おじいちゃん、おばあちゃん、みんなの力に助けられているのですね。これからのいずみちゃんの成長が楽しみです。　●島

・ナラティヴケアに対する反応の言語化を促し、体験の価値づけ、自分自身や家族の価値づけの強化を図る。
・体験の価値づけや自分自身や家族の価値づけに相当する部分を、看護者が言語化し伝えることにより、ナラティヴケアに対する反応の強化を図る。
・家族をよく知る看護者が、家族が自覚していない家族の強みを伝えることは、ナラティブケアの効果を補完するため、それらについても記載することが望ましい。

ナラティヴケアの記録と継続支援

- ナラティヴケアの後に、再び家族が小冊子を見ることは、新たな体験の想起のきっかけとなる。小冊子を家族に返却し、保管することを勧める。
- ナラティヴケアの実施に関する記録は、看護医療チーム内で共有する。可能であれば小冊子のコピーを保管する。面談により把握した家族の情報、アセスメント、今後の看護方針・計画について、看護記録に残し、共有する。
- 体験の想起により後悔や自責などのマイナスの感情が強まったり、新たな気づきが家族内の摩擦を生じさせるなど否定的な体験となる恐れがある場合は、電話訪問や面談などを計画し、継続的に支援する。

「ナラティヴケア」Q＆A

Q１　家族のうちのひとりしか面談に参加できない場合、ナラティヴケアは実施できませんか？

A　小冊子への記入を複数の家族が行っていれば、面談に参加するのが１人でも、ナラティヴケアの効果が期待できます。小冊子に記入すること、家族が記入した内容を読むこと、記入時に家族が体験について語り合うことが大切です。時間的制限や居住地が遠いなどの理由により参加したくてもできない場合は少なくありません。参加可能な家族に参加してもらい、参加できなかった家族に面談の様子を伝えることを促します。

Q２　面談には参加するものの小冊子への記入を拒む家族がいる場合、ナラティヴケアは実施できませんか？

A　「書くのが苦手」という家族がいても、家族が代筆すれば、ナラティヴケアを行うことができます。一人ひとりが体験を想起することが大切です。短い言葉でも構いませんので、家族の気持ちを聞き取り、誰かが書きとめて面談に参加してもらいます。

Q３　体験を想起する途中で、言葉に詰まったり涙ぐむなど、想起を続けることが困難になったら、どうしますか？

A　「途中で言葉に詰まる」「涙ぐむ」など、胸に秘めた思いがあると感じられるものの、一歩踏み込んで語りを促したほうがいいかどうか迷う場合、まずは、ファシリテートスキルにより語りを促します。しかし、語りたくない、語ることが苦痛であると受け止められる場合は、混乱した思いや辛い感情に理解を示し、次の話題に移るなど、追い詰めないようにします。家族同士のやりとりの中で、良好な関係性を維持するために「語らない」選択をする場合もあります。一人ひとりの反応に注意しながら、家族同士の自然なやり取りを尊重します。

Q４　面談中に、家族間に不穏な空気が流れたり、言い争いになったら、どうしますか？

A　家族に対する不満などが表出された場合、すぐに回避しようとせず、家族間での調整の経緯を見守ります。仲裁が必要な場合は、意見の対立や家族への不満があるのが普通であること、お互いの考えや価値観を理解し、受け止め、折り合いをつけていくことが大切であることを伝え、今後に向けて、家族が前向きになれるように配慮します。

平成 26 年度～28 年度
科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究（C）
「ナラティブアプローチによる育児困難乳幼児の祖父母支援の検証とガイドラインの創生」
研究代表者：石井邦子（千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科）
〒261-0014　千葉市美浜区若葉 2-10-1
E-Mail　kuniko.ishii@cpuhs.ac.jp
URL　http://square.umin.ac.jp/cpuhs-mm/
研究メンバー：
荒木　暁子（千葉県千葉リハビリテーションセンター看護局）
小池　幸子（千葉県千葉リハビリテーションセンター看護局）
水野　芳子（千葉県循環器病センター看護局）
市原　真穂（千葉科学大学看護学部）
佐藤　紀子（千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科）
北川　良子（千葉県立保健医療大学健康科学部看護学科）

本ガイドラインの無断転載はご遠慮ください。